

## 76 み たましろ いし 御魂代石



指 定 市有形文化財 昭和55年 3 月31日  
 所在地 田 口  
 所有者 新海三社神社



新海三社神社の中本社と西本社との間に、石幢形せきとうの石造物があり、古来御魂代石みたましろとよばれている。その造形の大略を記すと、自然石を重ねた約50cmの台の上に基礎、幢身、笠と宝珠を積み重ねてある。宝珠だけは、石質の異なるものが載せてある。

総高は約1.5m、幢身は円筒型で周囲約1mである。この幢身の上下に三筋の帯をめぐらした節をつけ、この上下の節の間に左右相称の竜が彫刻されている。

竜の頭部中間下方に「延文三年戌三月十二日」の刻記とその左右に花瓶が線刻してある。

笠は六角形二段葺きの形で強い照りの見られるのが特徴である。形態、彫刻ともにきわめて斬新でありながら一面古拙の味わいを持っている。

かつて専門家が調査して、これを石幢とし、龕部がんぶ（仏像を納める厨子）が失われたと説明したが、幢身、笠のつりあいからみて必ずしも龕部があったと考える必要はなく、単制石幢とみる方が自然であるように思われる。またあるものは、彫刻は竜でなく、ワニであり、出雲系諏訪神の海洋民族性を表すものではないかとの、説をなしている。